

Bruce Cumings,

North Korea: Another Country.

New York : The New Press, 2004, xiv + 241pp.

木宮正史

I

本書の著者ブルース・カミングス（シカゴ大学歴史学部教授）は『朝鮮戦争の起源』（全2巻）^(註1)の著者として知られる、米国を代表する朝鮮現代史研究者である。著者は、朝鮮戦争や米韓関係などに関して一次史料を駆使した精緻かつ独創的な実証研究を行いながらも、朝鮮半島をめぐる政治の現状分析に関しても、米国政府による既存の対朝鮮半島政策に批判的な立場から、積極的な政策提言を行ってきた。本書は、北朝鮮をめぐる核危機が深刻化するなか、著者の北朝鮮研究に関する初めての単行本として、出版前から注目を集めた。

本書は次の全6章から構成されている。

- 第1章 朝鮮戦争が北朝鮮社会にもたらした教訓
- 第2章 核危機
- 第3章 金日成神話について
- 第4章 北朝鮮の日常生活
- 第5章 世界で最初のポストモダン独裁者
- 第6章 善悪の彼岸
- 巻末 北朝鮮理解を深めるための参考文献リスト

本書は、戦争、核危機、政治指導者、庶民の日常生活など多様な対象を含んだものであり、各章の独立性の高い論文集である。また、本書は純粋な学術書とはいえない。むしろ、一般の読者を念頭に置いて、北朝鮮の核危機が深刻化するなかで北朝鮮という国家をどのように見たらよいのかに関して、米国内における支配的な見方、すなわち「北朝鮮＝得体の知れない敵」とは異なる見方を提示しようとし

ている点に、本書の意義を求めるべきだろう。

では、北朝鮮という国家をどのように見たらよいのかに関する著者の一貫した視角は何か。それを一言で集約しているのが、本書の副題「もうひとつ別の国」という言葉である。その含意は、北朝鮮を米国の慣れ親しんだ基準から一方的に「暴力的に」裁断するのではなく、米国とは異なる別の国であるということ認め、北朝鮮が経験した歴史的な条件などを十分に理解したうえで、その行動の論理を内在的に理解することが必要であるということである。

II

そこで、本書の内容を紹介し、それについての検討を加えることにするが、特に日本の読者にとって有益であると思われる第1章および第2章に主たる焦点を当てることにする。

第1章は、朝鮮戦争の経験がその後の北朝鮮にどのような影響を及ぼしたのかを論じており、歴史家カミングスらしさがよく表れた章である。朝鮮戦争は、脱植民地過程における革命的ナショナリズムとそれを封じ込める帝国主義勢力の対決であり、その意味で「第1のベトナム戦争」であったと位置づける著者の朝鮮戦争解釈は、米ソの代理戦争としての側面や開戦責任論だけに集中してきた従来の朝鮮戦争研究に対して、新たな地平を切り開く画期的なものであった。しかしその後、朝鮮戦争中の米軍による北朝鮮捕獲資料、さらには中国や旧ソ連の一次史料などに対する本格的な調査が進展するとともに、朝鮮戦争の開戦責任論の重要性が再評価されるようになった。したがって、それを軽視しすぎたという点で、著者の朝鮮戦争解釈は批判の矢面に立たされるようになった。

しかし、こうした解釈は、著者自身のベトナム戦争経験を何ら根拠なく朝鮮戦争解釈に投影させた産物では決してない。それまでほとんど注目されることのなかった米軍政や朝鮮戦争に関する膨大な一次史料を丹念に読み込むことによって、到達した結論である。そして、こうした史料調査の過程で、北朝鮮に対する米軍の戦闘行為がいかに非人道的なもの

であったのかにも注目し、そのことが、軍事的安全保障に対する北朝鮮の執着を必要以上に強くさせたと結論付ける。評者も、清津のあるホテルで焼け野原になった当時の写真を目にしたことがあるが、いかにその被害がすさまじいものであったのかを実感した。

第2章は、現在進行形の北朝鮮の核危機に関して、1993年から94年にかけての第1次核危機はもちろんであるが、朝鮮戦争以来の米国の対朝鮮半島軍事戦略に注目して、なぜ、核危機が再現されたのかという問題を論じている。まず、第1次核危機に関する既存研究に基づいて、著者はその原因とその解消過程を分析する。そのうえで、2002年になって、なぜ、核危機が再現したのかを分析する。NPTやジュネーブ枠組み合意など核兵器開発を放棄するという国際的な約束を北朝鮮が履行しないことに、核危機の原因を求める見方が支配的であるが、それに対して、著者は以下のような「反論」を提起する。

第1に、核危機の原因と関連して、朝鮮戦争以来、米国による切迫した核の脅威に常にさらされていたのは北朝鮮の方であったことを強調する。朝鮮戦争中の米軍による核兵器使用の検討、駐韓米軍に配置された戦術核の存在、1970年代半ばの朴正熙政権による核兵器開発、戦術核の撤退後における米韓合同軍事演習の実施など、北朝鮮が核の脅威に恒常的にさらされていたという指摘は、説得力を持つ。

第2に、北朝鮮の行動様式は、米朝国交樹立とエネルギー支援を目的とし、核開発をその手段として利用しているという点で、1993年11月の10項目提案以来一貫しているのに対して、むしろ、対応の一貫性を欠いていたのは米国の方であったことを強調する。クリントン政権前期には北朝鮮の提案を拒否することで緊張を激化させたが、1994年になって、この提案を受け入れることでジュネーブ枠組み合意が成立し、一旦は危機が回避された。その後、金大中政権の太陽政策の展開に基づく南北首脳会談開催やベリープロセスに基づく米朝ミサイル協議の進展など、米朝および南北関係改善へ向けた動きが進んだ。しかし、ブッシュ政権は、対北朝鮮政策に関する政府内の不統一や反クリントン路線への執着などに起

因して、対北朝鮮「放置」政策をとったという。

北朝鮮が秘密裏に核開発を継続しているのではないかという情報を、ブッシュ政権はクリントン政権から引き継いでいたにもかかわらず、当初はそれを無視したままで、2002年10月になってケリー国務次官補の訪朝を契機に、北朝鮮が核開発を是認したことを暴露したという指摘は、興味深い。もし、それが事実であるとする、小泉訪朝と日朝平壤宣言に伴う朝鮮半島をめぐる緊張緩和の動きに対して、米国がブレーキをかける意図を持っていたという著者の指摘は相当に説得力を持つことになる。

このように、ブッシュ政権は危機回避の好機をみすみす逃しただけではなく、必要以上に危機を「悪化」させたということになる。危機の原因を提供したのは北朝鮮だけではなく、むしろ一貫性のない米国の政策なのであるから、危機回避のためには、北朝鮮に一方的な譲歩を迫るのではなく、米国の責任の方が大きいという主張につながる。

第3章では、金日成が権力を掌握する過程を、満州における抗日ゲリラ闘争の経験や解放直後のソ連占領下の状況との関連で明らかにしている。第4章では、歴史的条件や限られた情報に基づいて、北朝鮮における日常生活の年代ごとの変化を明らかにする。特に、儒教に起因する朝鮮社会の伝統的価値観が、北朝鮮の日常生活に色濃く残っていることを強調する。このように、伝統的要素と新しい要素との混合として北朝鮮社会を理解する解釈は、北朝鮮の体制を「儒教的コーポラティズム」^(注2)と規定した著者の既存の立場を想起させる。第5章では金正日^{キムジョンイル}に焦点を当てる。その出生の経緯から謎に包まれた部分の多い金正日であるが、息子金正男^{キムジョンナム}の幼少時の遊び相手（のちに従姉妹）であり、現在亡命中のリ・ナムオクの回顧などに基づいて、彼女とともに金正男にジュネーブで中等教育を受けさせたなど、興味深い事実を指摘する。そして、金正日は朝鮮の伝統的価値観に基づいた部分を持つが、現代のハイテク技術に対する関心が高く、ポストモダン的な価値をも併せ持っている。その意味で「ポストモダンの独裁者」とみなす。

終章では、「善悪の彼岸」というニーチェの有名な

言葉を表題にして、北朝鮮をどのように見たらよいのかという根本的な問題を再論する。まず、1970年代までは韓国に勝るとも劣らぬ経済力を誇っていたほど、開発途上国の中でも相対的な「優等生」であった北朝鮮が、特に1990年代以降、飢餓に陥るほどに経済が困窮するに至った点に注目し、いかに苛酷な自然環境や国際政治環境に取り巻かれてきたのかを考察する。しかし、他方で、北朝鮮の政治的条件は、こうした困難を克服できる程度の潜在力を持っていると主張する。また、米国の対北朝鮮政策の背後にある種の「レイシズム」(racism)が存在していたのではないかという興味深い主張を展開する。最後に、米国流の善悪二元論的な基準で北朝鮮を「悪の枢軸」と決め付けるのではなく、歴史的条件によって制約された北朝鮮の内在的な論理に基づいて北朝鮮理解を試みることの必要性を再度強調して、本書を締め括る。

III

本書の文章はニュアンスに富んでいるため、主張がストレートな形で表現されているわけではない。にもかかわらず、本書全体を通じて一貫する著者の主張は明確である。善悪二元論に基づいた「北朝鮮 = 『悪の枢軸』」という見方に対する痛烈な批判である。北朝鮮を含む朝鮮半島の歴史的経験を理解することによって、北朝鮮の行動様式を合理的に理解することが十分可能であるにもかかわらず、そうした知的な努力を怠り、北朝鮮を非合理的な存在として「切り捨てる」という「知的怠慢さ」を許さないという姿勢である。確かに、北朝鮮が核開発を進めようとしたり、外交カードとして核開発を利用しようとしたりすることは非難されるべきことではあるが、それに劣らず、北朝鮮のような非核保有国に対して、核不拡散条約体制という元来が不平等な体制の下で、朝鮮戦争以来の長期にわたり恒常的に核の脅威という圧力をかけ続けてきた米国の政策を省みる必要があるという主張には説得力がある。以上のように、本書は、米国の一般読者を対象として、対北朝鮮、対朝鮮半島政策に関する米国の自省を訴えかけた貴

重な書であり、核危機の再現を前後して出版された多くの「北朝鮮研究書」の中でもひととき異彩を放つものであると言える。

しかし、本書には次のような批判が予想される。北朝鮮を内在的に理解すべきだという主張は、ともすれば文化的相対主義につながるものであり、北朝鮮の特殊性を是認し、その「異常な」行動を「許容」してしまうことになるのではないかという批判である。ちょうど、1970年代韓国の朴正熙政権の人権弾圧に対して、同様な批判が加えられたことを想起させる。もちろん、本書は北朝鮮の現状を肯定的に見ているわけでは決してない。その意味で、北朝鮮に「甘い」という単純な批判は的外れである。にもかかわらず、本書の北朝鮮分析には物足りなさが残る。それは、なぜなのか。

本書は、北朝鮮を「もうひとつ別の国」として見ることができない米国の対北朝鮮政策への批判に重点を置く。したがって、特に米国を北朝鮮の指導者がどのように認識しているのかに関しては綿密な分析が行われている。しかし、北朝鮮の国家や社会に関しては、第3章～第5章で興味深いエピソードがちりばめられているが、独自性のある体系的な分析が行われているわけではない。そして、核危機に関する北朝鮮の選択に関して、それを帰結させるような北朝鮮の内的な条件が綿密に分析されているとは言いがたい。同様な苛酷な条件に置かれている他の国家が、北朝鮮と同様な核開発という手段を常に選択するとは限らない。北朝鮮の選択を帰結させる内的条件が何であるのかに関する分析が求められるはずだ。核危機を北朝鮮の一方的な責任に帰結させるのはもちろん問題であるが、他方で米国の責任に一方的に帰着させるのも同様に問題をはらむ。その意味で、北朝鮮それ自体に関する内在的で体系的な分析があったならば、核危機に関する分析は、もっと説得力を増したのではないかと惜しまれる。

最後に、本書における著者の主張は、日本社会にとってどのような意味を持つのかを考えてみたい。本書は、確かに米国内の一般読者を対象としたものであり、日本の読者にとっては必要とは思われない箇所、理解しがたい箇所が見られる。北朝鮮への関

心度や関心の持ち方に関して、日米両国社会の間に違いがあるのは当然である。北朝鮮のミサイルの射程距離に日本が入っていることなど、北朝鮮の核保有がもたらす脅威は、地政学的な点で日本にとってはよりいっそう深刻な現実のものである。また、日朝間には拉致問題が横たわっている。このように、マスコミにおける北朝鮮報道の「氾濫」は、ある意味では、北朝鮮に対する日本社会の高い関心の証でもある。

そして、そうであればあるほど、北朝鮮をどのように理解するのかという姿勢がよりいっそう問われることになる。北朝鮮の行動様式を理解するために、その論理を内在的に理解する作業が必要である。しかし、ともすれば、そうした必要性を主張すること自体、北朝鮮の主張を正当化するものであるとみなされかねない「雰囲気」が日本に存在していないとは言いがたい。また、そうした当たり前の地道な作業すら行われぬまま、何の根拠もないことであっても、対北朝鮮強硬論を声高に叫んでいれば許されるような知的雰囲気が全くないとは言いきれない。北朝鮮を「もうひとつ別の国」として理解すべきだという著者の主張は、日本社会にも十分に通用する普遍性を持っている。

(注1) Bruce Cumings, *The Origins of the Korean War vol.1 Liberation and the Emergence of Separate Regimes, 1945-1947*. Princeton: Princeton University Press, 1981 (第1巻 鄭敬謨・林哲訳/第2巻 鄭敬謨・加地永都子訳『朝鮮戦争の起源——解放と南北分断体制の出現——』第1・2巻 シアレムヒ社〔影書房〕1989・91年) / Bruce Cumings, *The Origins of the Korean War vol.2 The Roaring of the Cataract 1947-1950*. Princeton: Princeton University Press, 1990. その他、カミングスの代表的著作としては、韓国を中心とした朝鮮半島の現代史を扱った次の文献を参照されたい。Bruce Cumings, *Korea's Place in the Sun: A Modern History*. New York: W.W.Norton & Company, 1997 (横田安司・小林知子訳『現代朝鮮の歴史——世界のなかの朝鮮——』明石書店 2003年)。

(注2) 「儒教的コーポラティズム」については、以下の著作を参照されたい。Bruce Cumings (1997), *Korea's Place in the Sun...* pp. 394-433 (日本語訳 677-750 ページ)。

(東京大学大学院総合文化研究科助教授)